

びじゅつ すげえ! 2015-2016

目次

ごあいさつ	1
空をながめて、美術館に行こう	
I びじゅつって、すげえ!	
・美術は日常の中にある	3
・身体と感覚を目覚めさせよう	5
・美術は決して特別なモノではない	7
II 大分の「すげえ!」を集めた教材ボックス	
・ひとつひとつが小さな美術館	9
・夜のおとなの金曜講座	11
見るは楽しい教材ボックス	12
大分県から絵の具をつくる	17
美術からみた文化	18
素材と技術	
III みる、つくる、かんじる美術体験プログラム	
ワークショップ&レクチャー	
・どなたでもワークショップ	
「アトリエ・ミュージアム みんなでつくろっ!」	19
・みんなの土曜アトリエ 体験から鑑賞まで	23
・特別ワークショップ&レクチャー	27
・ワークショップができるまで	35
遊び場としての美術館	
I 「見る」から「見る」へ	
・作品を「見る」ということ	37
・美術館へ遊びに行く	39
II スクール・プログラム	
・びじゅつかんの旅	41
・アウトリーチ・プログラム	45
・先生のための講座	47
・ファーストミュージアム体験事業	49
・学校と美術館の連携	51
大分県内アウトリーチ&フィールドワーク実施地図	53
実施一覧	55

ご挨拶

「アートフル大分プロジェクト実行委員会」は、大分県立美術館を核として構成された実行委員会であり、文化庁の助成により、「地域と連携した美術による人材育成事業」に取り組んでまいりました。

その一環として、「美術に出会うこと・美術作品を見ること」に関する考え方と事例をテキストとしてまとめ、地域の指導者にご提供することとしました。地域の様々な方々に新たな視点からアートに出会っていただくための参考として活用していただければ幸いです。

アートフル大分プロジェクト実行委員会

郷土の生んだ偉人の一人に三浦梅園がいます。彼は、長崎と伊勢への三度の旅行以外は、その生涯を国東で過ごし、万卷の書を読み、思索に耽りました。そして、完成させた梅園の思想体系は、内藤湖南などから高い評価を得ています。「枯れ木に花咲きたりといふとも、先、生木に花咲く故をたずぬべし」は、有名ですが、「石を手に持ちて手を放せば、地に落つるはいかなる故ぞ」とも言っており、林檎が木から落ちるのを見て万有引力の考えをまとめたニュートンも、梅園を知っていたらびびりしていたでしょう。

梅園の、徹底した批判的思考力には驚嘆しますが、その考えは深い教養に根ざしたものであり、そして、教養とは、知識の量ではなく、その知識を土台にして自分で考える総合的な能力です。そして、その総合的な能力の鍵となる要素は、「感性」なのです。バートランド・ラッセルも「教育論」で教育の目的として、活力、勇気、感性、知性を挙げています。

感性教育において、美術館が持つ教育機能は大変重要であり、開館一年前から体制を整え、学校や地域の公民館等で、地域の歴史や文化を「色」や「形」という美術的な視点から見直す、地元に着した“大分県ならではの”美術館教育の仕組みづくりに取り組んでまいりました。

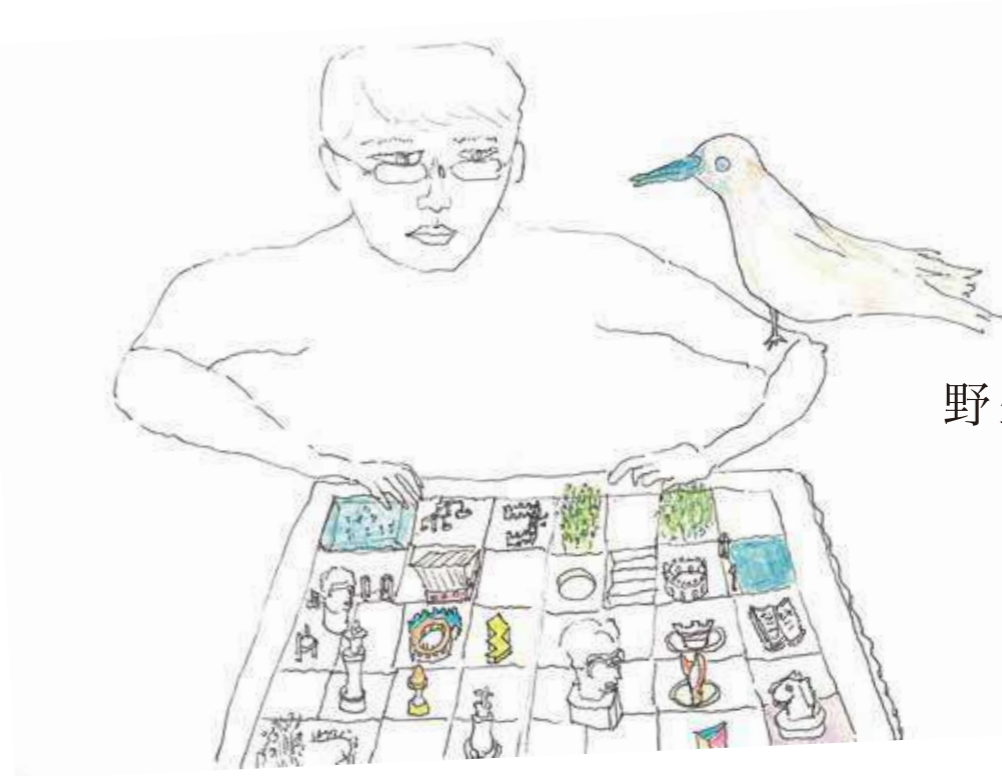
そのような流れを受けて、広瀬知事の格段のご配慮のもと、県教育委員会と連携して、県内全小学生6万人を開幕展に招待しました。また、離島や山間地での小中学校を対象とした出張授業、地域や学校での巡回展を行い、さらには、採用2年目にあたる小学校教員等を対象とした美術館での研修なども実施してきました。

私は、少子化・高齢化が確実に予測される時代において、地域活動の持続的な発展を可能にするのは教育であり、自分たちの足元に元々あった地域の宝を、さらに磨くことで、各地域の人々が、地域への愛着と誇り、夢を持ち続け、それぞれの地域の発展につながっていくと確信しております。

この冊子は、美術館開館1周年を迎えるに当たり、美術館の活動のうち、感性の醸成に関わる活動を記録したものです。皆様方のご参考に供しますとともに、これからの活動の充実のため、ご意見をお寄せくださることをご期待申し上げます。

公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団

理事長 佐藤 禎一 | 元ユネスコ代表部特命全権大使
東京国立博物館名誉館長



野生の奪還のために

この我が身、宇宙の雛型にして、芸術の「原型」也。

二十世紀きっての神秘思想家であったルドルフ・シュタイナーは、人間の身体には、宇宙の、無限に広がる動態の秘密、そのすべてが隠されていると考えた。

私も人間は、皆、生身の我が身一己そのもので、全宇宙の秘密を内包した、「宝の箱」なのである。

だが、生はまた永遠に、その解明開発の途上である。

天才モーツァルトの音楽を聴く時、私もはまた、そこに開示されているものが、「変転し、移り変わり、瞬時も止まることの無い、自然と宇宙の動態変化」そのものであって、その微細で雄渾なる千変万化のなかに、人や地上の生命体すべてが等しく経験する、「今生き、今死に、生まれては死に、死んで生きる」輪廻転生が、そのまま現前していることの驚異に、驚愕する。

「奇跡は、今まさに、起きている」。

それが、生の高揚の実感でなくて、何であろうか？

その瞬間こそが、すべての人間が芸術家たることのできる、希有で平等な、開かれた「永遠=今ここ」なのである。

新生OPAM大分県立美術館は、斯くなる思想をそのすべての活動の根幹にすえている。

以下にご紹介するのは、その日日の実践、苦闘と快樂の瞬時瞬間、そして、愛の物語である。

(註)
シュタイナーについては、すべて畏友松本順正、能勢伊勢雄師の、あるいは泰斗高橋巖先生の諸論を借りた。
モーツァルトについても、遠山一行先生の、あるいは先生のひくカール・バルトの論を借りた。

空をながめて、美術館に行こう

美術館に行くための準備運動として必要なことがあるとすると
今日空を見てね、天気どうだと、雲が綺麗なだと、風は気持ちいいなどと
そういうごく自然でたいしたことないけど
非常に大事な日々の空気というか、気配というか
昔の人が普通にやっていたことをやっているかどうかを練習して
知識の勉強ではなくて
空を見る習慣をつけて美術館に来てください

(館長 新見 隆 —OPAM開館に向けての挨拶より)

I. びじゅつって、すげえ！

美術は日常の中にある

きれいだなあと感じることは「美術している」こと

鳥の声で目覚めるまだ夜明け前の朝。東の空は徐々に明るくなり、上る太陽は青金に光っていく。雨の日の散歩で、水たまりに飛び込めば四方八方にしぶきが飛び散る。雨あがりの葉っぱの上や蜘蛛の巣は宝石だらけ。ちょっと地面にしゃがみ込むだけで、発芽したばかりのタンポポの芽が、これから咲き誇る命の力をすでにのぞかせていることに気づく。夕方西の空に沈んだ太陽を追いかけると沈む下弦の月は、空気を一層きりりとする。こうした毎日の中に在るたくさんの美しいモノやコト。日々の暮らしの中で、美を発見する目を獲得すれば、世界はとたんに魅力あふれたものとなる。大分県内、ちょっと出かければ、もう山、山、山。市内も足元に目を向ければ、道路わきに様々な植物が生えている。これらの植物を愛でることができるなら、美術館はいらないかもしれない。

美術とは何か？ その答えの一つは、美しいものを美しいと感じる心。美しいと感じるものは身の回りにいっぱいあるだろう。では美術館とは？ 美術館は博物館の一種であり、美術作品を中心とした文化的遺産を収集・調査・研究、保存・修復、そして展示を行う施設である。そんな言い方をすると、何やら高尚なもの、敷居の高いものを感じる人がいるかもしれない。美術館では美術の歴史や作家に対する知識、あるいは技法や素材に関することなど何も知らなくても、美術作品を見ることを楽しむことはいつでもできる。美術館は何かを学ばなくてはいけない場所ではない。自分なりのモノの見方ができるとモノを見るのが楽しくなり、日常が生き生きとしてくる。きっと美術作品に接することも楽しくなるだろう。

美術とは決して特別なモノでも、難しいモノでもない。日常に在る身近なモノに目を向け、きれいだなあ、面白いなあと感じることは「美術している」ことだ。少し難しい言葉で言うと、美術とは認識の拡大である、と言ってよいだろう。情報や知識に頼らず、一人一人が自分の視点を持つことで、美術作品と出会った時に、自分の見方で楽しめるのだ。

自分なりのモノの見方ができると、楽しい

2015年4月24日、大分県立美術館(OPAM)は開館した。

しかし新しく美術館ができたといっても、そもそも何をするとこころなのだろう。普通は、美術館といえば展覧会を開催しているところ、つまり展示が一番に思い浮かぶことだろう。しかし展覧会を開催するためには、作品や、作った人の調査・研究をしなくてはならないし、次世代に伝えていくために保存・修復も大切な仕事だ。美術館には、大きく分けると「調査・研究」「保存・修復」、そして「展覧会の開催」という3つの仕事がある。そして昨今では、これらに加えて「教育普及」の仕事も重要であると言われ始め、OPAMはこの教育普及に力を入れている。

では美術館の教育普及の仕事とはどういったものだろうか。例えば、わかりやすい作品解説、ふだん家や学校ではできないダイナミックな制作活動、専門的な知識や技術に触れる、などがすぐに思い浮かぶ。しかしこれらは教育普及の目的ではなく、手段である。では教育普及の目的とは？それは、多くの人にモノを見る楽しさを知ってもらいたいことだ。そしてそのためのきっかけや出会いを作ったり、ドキドキ、ワクワクするような好奇心を触発することが教育普及の仕事だと考えている。逆に言えば、一人ひとりが自分でモノを見る楽しさを知っていれば、そして個人が個人として美術館を楽しむことができるのなら、教育普及の活動はなくてもいいだろう。一番大切なのは、自分なりのモノの見方ができることだ。そうすればいたるところに在る“美”を発見する独自の視点を獲得でき、それは美術作品に出会った時、見方や楽しみ方が膨らむことにつながる。



榎本寿紀

Toshiki Enomoto
大分県立美術館 学芸普及課 教育普及グループ
グループリーダー

飛行機では窓際、車では助手席は外せない。突然「あそこ！」と止まり、石やタネをひろう。好奇心という名の欲望は人一倍強く、大分県内の動植物から鉱物までを探索中。大分に移り住んだにも関わらず、シイタケを美味しいと感じたのは人生で2回だけ。これからは???



身体と感覚を目覚めさせよう

身の回りの「すごい！」に気づく

大分県立美術館教育普及グループでは、「びじゅつって、すごい！」を活動の中心にしている。「うわ!」「なにこれ!」「すごい!」。人は初めてのモノ、不思議なモノ、きれいなモノなどに会った時、心が大きく動き、思わず口に出てしまう言葉がある。もちろん驚いて言葉にならない場合もあるだろう。そんな驚きや発見を「すごい!」という言葉で表した。

例えば、道端や空き地の植物のタネ、台所の野菜のタネを見よう、というワークショップを行っている。肉眼では小さな粒に見えるタネを、顕微鏡で見るとどうだろう。形の面白さ、複雑さに、子供も大人も「すごい!」とびっくりする。あるいは校庭や通学路に落ちている石ころを砕いて絵の具にするワークショップでは、その美しさに思わず「すごい!」と声があがる。どこにでもあるが見過ごしがちなモノの中に何かを発見した時こそ、思わず「すごい!」と口に出る。「すごい!」と感じるものは日常の中にいっぱいある。それを見つけることができるかどうか。「すごい!」と思えるモノやコトに出会うかどうかが大切だ。

「びじゅつって、すごい!」は、子供から大人までを対象に、身の回りのいろんな「すごい!」を見つけることで、自分の視点を持つためのきっかけ作りを行う活動である。そして我々の教育普及活動の根本は「一緒に楽しむ」こと。それは同じ時間と場所をみんなまで共有するというワークショップにおいて、より濃く特徴が表れる。我々自身が楽しむこと。来館者とコミュニケーションをとること。楽しいことは自然と多くの人に伝わっていく。みんなでより多くの「すごい!」を見つけ、今後のさらなる楽しさから、美術＝認識の拡大をしていきたい。



「情報を得る」と「体感する」の差は大きい

自分の「すごい!」を見つけるのに一番大切なもの。それは身体と感覚だ。21世紀に入り、携帯電話とインターネットの普及に伴って、膨大な情報が家庭でも出先でもどこでも手軽に手に入る時代になった。仮想現実空間の技術は進化し、コンピューターグラフィックや3Dによる映像は違和感なく楽しめるようになりつつあり、3Dプリンターも登場した。しかし情報と体感の差は大きい。かつては情報を得ると、その先に何が実際に待っているのか、ワクワク、ドキドキしながら期待をふくませ、想像に心を躍らせたものだ。しかし今は情報が多くなりすぎ、ともすると得た情報だけで満足してしまう場合も少なくないのではないか。

インターネットのおかげで世界の裏まで鮮明な画像で知ることができたとしても、風や匂いはそこに行かないとわからない。身体は素直だ。耳を澄ましてみる。鳥のさえずり。風が樹々を通り過ぎる音。車の走り去る音。子供の笑い声。集中すると、私たちの世界は何と多くの音に満ちあふれているかに気づく。今まででもずっとそこに在ったはずなのに、意識しなければ、感じることは少ない。と同時に、人は聞きたくない雑音をシャットアウトできるのだ。あるいは目をつむる。それだけで見えていなかったものが見えてくる。視覚でとらえることができるのは、色彩、形態、そして空間。しかし目をつむった瞬間、質感と触感の違いがあらわになる。温度、重さ、構造。さらに視覚でしかとらえられない色彩や空間については、想像を巡らすようになる。

身体と感覚を使って、「すごい!」を見つける

人間の感覚も、自らが意識した瞬間には様々なモノやコトを感じることができるのに、そのスイッチはオフになっていることも多い。情報が氾濫する便利な世の中、体感するという機会は少なくなっている。だからこそ、「すごい!」を見つけるためには、身体と感覚を活性化するというだろう。今まで眠っていた感覚が目覚め、世界が広がる。

例えば「ふわもこ」というワークショップでは、直径8mの布の周囲を20名ぐらいで持ち、上下に揺らす。すると空気が入り、布はふわふわ、もこもこ、形を変えていく。呼吸を合わせると大きな卵型のドームができ、中に入ることもできる。自分より大きなものがすぐ目の前に出現するだけで、子供も大人も「わあ、すごい!」「面白い!」と大歓声。空気をはらんだ布の触感心地よく、ダイナミックで思わず身体全体を預けたい。全身をすっぽりと布に覆われる快感。こうした感覚を際立たせて世界と向き合う時間は大切だ。子供たちが喜ぶのはもちろん、大人にも、直接的な体感を伴う行為は「子供に帰った感覚で楽しい」と感じる人が多いようだ。身体と感覚は解放され、その後の活動が生き生きとしたものに繋がる。子供に帰った瞬間の感覚は身体に残り、表現の源にもなる。身体と感覚。この2つを意識することで、人が人として生きる力を取り戻すことができるのではないだろうか。

美術館という場所を使って、自ら活性化する身体と感覚を手に入れてほしいと同時に、それを楽しみながら使う場所として、美術館を活用してほしい。みんなと同じ時間と場所を共有しながら、自分の視点を持ち、新しい自分を発見するきっかけを作る。五感を刺激、あるいは働かせて、全身で美術を体感する。身体が喜ぶという体感。目や耳から得た情報と違って、「楽しい」「すごい」「面白い」と時間を忘れて夢中になることは、人の記憶としてしっかりとリアルに身体の奥に刻み込まれる。情報社会となった今、自らが体感する機会がますます重要となるだろう。

(榎本寿紀)

美術は決して特別なモノではない

大分は県全体が美術館・博物館だ

OPAM教育普及グループでは、専門スタッフ3名で開館約1年前から準備をスタートした。日常の中の美術と美術館。それを考えるために、まずは県内を端から端まで見渡してみることに始めた。すると山に行けば行くほど、海に行けば行くほど、公共交通機関は整っていないし、市内のど真ん中に建つ県立美術館に行くには、なかなか行きづらい地域もいっぱいだと思った。美術館に行けないのなら、こちらから出向く。この発想が「アウトリーチ」の活動につながった。これは準備室時代からすぐに取り掛かり、現在まで続いている。そこで行っているのは、主に美術体験。作品を描く、つくる、そして美術作品を見ることだけではなく、身の回りからきれいだと思えるモノを見つけること、身体表現、さらに目をつむる・耳を澄ますなどの五感を意識することなど。美術とはとても幅が広くて面白そうなものだと興味を持ち、やがて大人になってから美術館に足を運ぶことにつながればと思っての活動だ。準備室時代にはその数29か所、参加者人数延べ1423名。今後でもできる限り、地域を訪れることは続けていきたいと思っている。

また地域へ行くたびに感じたのが、ここには美術館はないけれども、いたる所に美術はいっぱいあるということ。大分は県全体が美術館・博物館といえるような魅力にあふれている。こうした身のまわりに在る美に着目し、「オリジナル教材ボックス」の制作を開始した。大分に住んでいても、知っているようで知らない大分が意外とあるに違いない。そう考え、県内各地でアウトリーチを行うかわら、ふるさとの魅力再発見を美術的視点で行い、石や植物、貝殻など、好奇心を触発する“美のカケラ”を集めていった。

県内じゅうを歩き回って、教材ボックスを制作

山あり、谷あり、川あり、海ありの大分県はとにかく広い。中でも地質学的に大分県は特別な地域で、足元に落ちている石ころは色がとても豊富なことをご存じだろうか。理学博士の野田雅之氏からこのことを教わった我々は、行く先々で石を拾い集め、独自の積み木ならぬ積み石にしている。これはバランスをとるのが難しいが、積むと不思議な形ができるので思わず集中してしまう。また顔料作り。石を砕き、粉にして、絵の具のもとになる顔料をつくる。これら大分県の石ころや鉱物の専門的な話を野田氏から伺い、多くのアドバイスをいただいている。氏によると、地質的に特異な場所は四浦半島に集中しているという。日曜日に何度か案内していただいた。ヘルメットに作業着と安全靴。とても88歳(2014年当時)という年齢には見えないいでたちで、ハンマー片手にガンガン歩く。さすがにここは無理では!?と思うような断崖絶壁を降りたこともあった。湾曲している地層や砂浜により異なる石の色、自然の中にある造形美に心を奪われた。

その後、我々スタッフだけで辰砂を探して丹川を歩き回ったり、宇目の観音滝でヒルに血を吸われたことも今ではいい思い出だ。他にもヒメコウゾを探して日本茜を偶然見つけたり、紫根やサフラン栽培の現場、津久見石灰採石場なども訪問することができた。

こうした教材ボックス制作に伴うフィールドワークは、ワークショップやレクチャーの美術体験プログラムにもつながっていく。地学や植物学、そして民俗学の先生や左官の親方など、通常では美術の分野に入れないさまざまな分野の専門家との出会いがあり、そんな方々から教わったことは、美術的視点で捉えると、一般の人びとが大いに楽しめる内容であると確信した。開館後に美術館で行うプログラムを企画準備していくとともに、情報コーナーに常設する書籍についても、教材ボックスや今後のワークショップ、レクチャーを想定しつつ、図鑑や絵本を多くそろえていきたいと準備した。

全力で突っ走った開館後の1年

開館すぐのゴールデンウィークには、「モノと写真が語るこれからの教育普及」と題した展覧会を開催した。準備室時代に訪れた小学校の生徒たちの作品を記録写真と共に展示したほか、教材ボックスのお披露目、そしてこれからワークショップをはじめとした講座で使用する道具や素材を展示し、今後の教育普及活動を暗示させる内容となった。連日多くの人たちが訪れ、美のカケラがぎっしり詰まった教材ボックスやアトリエの展示に感嘆の声があがった。

ゴールデンウィークが明けるとすぐ、県内全小学生招待事業「ファーストミュージアム」がスタート。県内の小学生6万人、1日平均1350人が連日やって来た。正直ヘトヘトになったが、大分県じゅうの小学生と顔見知りになり、街を歩くと子供たちから指さされるのがうれしくもあった。

毎週末には、美術に親むさまざまな内容のワークショップやレクチャーをすべて自分たちで企画し、実施している。また長期の休みや祝日、連休には、通常より長い時間のコースや企画展の作家を招いての特別ワークショップも開催。予想以上に多くの人びとに参加していただき、教育普及スタッフも全力投球の日々だった。OPAM来館者は2015年春の開館以来、60万人を突破。ワークショップ&レクチャーは2016年2月末までに235コース開催し、参加者数は延べ5,917人となった。

美術は決して難しいモノではない。美術館もそうだ。そう感じてもらえるようにと数々のワークショップ&レクチャーを開催し、がむしゃらに突っ走ったこの1年。あらためて活動を振り返るとともに、美術とはなにか、美術館とはどんなところかを確認していきたい。

(榎本寿紀)



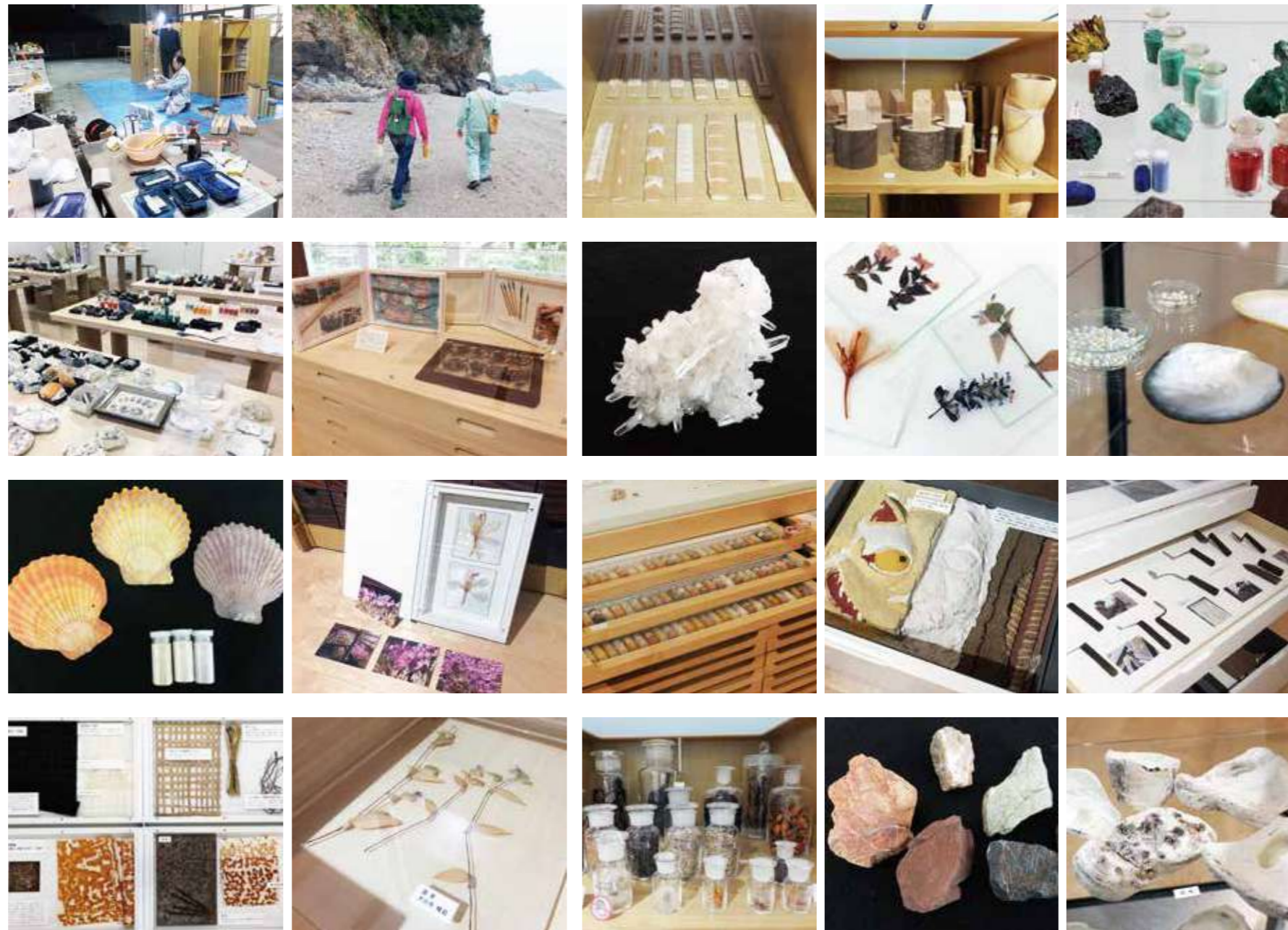
モノと写真が語るこれからの教育普及

II. 大分の「すげえ!」を集めた教材ボックス

ひとつひとつが小さな美術館

身近な大分の「美」に着目し、県内全域の石や土、植物、石灰岩などからさまざまな“美のカケラ”を集め、工芸品なども加えて、大分県立美術館独自の教材ボックスを制作した。全体は「ストーン・ボックス」「プラント&メディスン・ボックス」「CCボックス」「マテリアル&テクニク・ボックス」という、テーマ別に分かれた4つのボックスからなる。我々スタッフ自らが地域へ赴いて集めた実物標本をはじめ、素材や道具、あるいは所蔵作品に関連した画像や資料などを、ひとつひとつがきれいに見えるようビジュアル的に収めている。本体は、鉄のフレームと透明なガラスで作った展示ケースのようなボックスや、植物染料で染め付けたカラフルな木のボックス、漆喰をイメージした塗装仕上げのボックスなど、4つのテーマに沿ったデザインになっている。中身は、絵の具のもとになる鉱物はゆつたりと、標本瓶に詰まったタネやガラス板に挟まった花・葉っぱなどの植物はぎっしりと、まるで小さな美術館のように並んでいる。

このボックスは、通常は美術館2Fの教育普及スペースに展示している。見た人が、きれいなモノが実は身近な存在だということを知るとともに、日常からの再発見をしてみようという気持ちに結び付けばと思っている。好奇心を触発し、利用者が日常から美術の世界へ足を踏み出すことを誘いたい。中身は現在も制作進行中で、これからも増えていく予定だ。今後はこの教材ボックスを移動美術館で地域にも運んで行き、より多くの人に見ていただくとともに、そこで内容を増やしていきたい。



4つの教材ボックス

A ストーン・ボックス～ミネラルからピグメント

絵の具は石からできている。大分県内の山、川、海で採集した土・石、およびそれらを砕いて制作した顔料、展色材による色見本、富貴寺大堂壁画・白杵磨崖仏ほか、県内の石仏で使用していると推定される顔料と鉱物を収納。また小鹿田焼で使用されている土、粘土、化粧土と釉薬、道具から皿、器を集める。さらに県内の海岸より石を採集し、積み石によるストーン・トイを制作して、ワークショップやアウトリーチで活用している。

B プラント & メディスン・ボックス

大分県には、紫根やサフラン、七草イ、マダケ、モウソウチクをはじめ、植物染料、生薬、竹工芸などに見られるように、昔から生活に密着した植物が数多く生育している。植物への好奇心を触発し、植物の色や形からイマジネーションを刺激するボックス。竹工芸より編目組目パターン、道具、さらに杉・檜・クスギほか県産材や、県産材オリジナル積み木による「ふそろいの積み木」「バランス積み木」「木っ端の積み木」も含まれる。

C CCボックス (calcium carbonate 炭酸カルシウム)

石灰岩、大理石、方解石。建築材料から日本画顔料まで、用途が変わると名前も変わるが、もとは炭酸カルシウム。「CCボックス」は“calcium carbonate (炭酸カルシウム)”の頭文字からネーミングした。津久見の石灰岩より生石灰、消石灰から漆喰、そして貝殻や珊瑚、さらに鏝絵の道具や歴史、風連鍾乳洞をはじめとした自然の造形美も加わっている。

D マテリアル & テクニク・ボックス

コレクション作品の制作工程や素材を対象としたボックス。美術館所蔵作家より古澤万千子氏の染色、アトリウムを飾る須藤玲子氏の折り紙織の素材と技術、さらに表現との関係に迫ることができる。今後は県内の工芸について網羅していく予定。

※教材ボックスは美術館のアトリウム等に展示し、ワークショップ、レクチャー等で活用するとともに、将来的には学校への貸し出しも視野に入れている。



A ストーン・ボックス

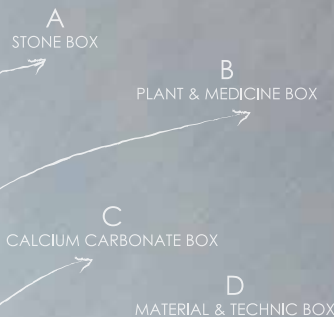
B プラント & メディスン・ボックス

C CCボックス

D マテリアル & テクニク・ボックス

夜のおとなの金曜講座

仕事や学校の帰りに、気軽に美術館へ立ち寄ってほしい。そんな思いから「夜のおとなの金曜講座」は始まった。好奇心を触発し、モノを視る楽しさを知れば、より美術館に足を運ぶ回数も増える。こうした狙いから、教材ボックスを中心に、「視るは楽しい教材ボックス」「大分県から絵の具をつくる」「美術からみた文化」「素材と技術」という4つのテーマを設け、毎週金曜日の夜に開催している。この講座は続けるうちに口コミでだんだんと参加者が増えていき、今では癒しの時間として仕事帰りに参加される方が少なくない。



1 視るは楽しい教材ボックス

4つの教材ボックスから順次テーマを見つけて、資料の詳細に制作秘話を交え、時には資料を手にとったり、素材に触れながら紹介している。じっくり“視る”ことは楽しい!を体感する講座だ。

A

「ストーン・ボックス」より

【 石の引力・鉱物 】

絵の具のもとである顔料の多くは鉱物だ。藍銅鉱(らんどうこう)、孔雀石、辰砂(しんしゃ)、石黄(せきおう)、方解石、水晶。結晶化した鉱物の美しさは人を魅了する。ストーン・ボックスを見ながら、絵の具のもとで、しかも大分県に在る鉱物の話をした。中央構造線と南海トラフのまじりあう津久見湾周辺では、年間8mm動くプレートからの隆起により、石の色は他の地域に類を見ない。鉄分を多く含む石は海の中の酸素が多ければ赤く、少なければ緑になるという。大分県で鉱山が稼働していたころ、各地の鉱山に出かけて鉱物を採集した野田雅之氏によると、佐伯市宇目の木浦鉱山では美しい藍銅鉱や緑の孔雀石も採れたという。別府金山(現・ラクテンチ)や大分市丹生川の上流では辰砂が、豊後大野市松谷や佐伯市の屋形島では赤鉄鉱(ヘマタイト)も採れたそうだ。そう聞くと居ても立ってもいられない。広域地図だけを頼りにスタッフで数カ所行ってみたところ、それらの鉱物がいくつか採集でき、ストーン・ボックスに収納している。講座内でそれらの石を見た参加者から「吸い込まれそう」との声があがった。石には引力がある。気を付けないと取り込まれそう。



【 石の引力・色が残る 】

ストーン・ボックスの顔料を見ながら、大分の歴史遺産である磨崖仏に残る色彩の話をした。多くの仏像や神像と同様、もともと磨崖仏も彩色されていたらしい。しかしほとんどの磨崖仏は経年変化で色彩は失われてしまった。そんな中で白杵磨崖仏は1000年前程の色がわずかに残っている。白杵市文化・文化財課の神田高士氏立ち会いのもと、白杵磨崖仏の柵の中に入り、ディテールを実見する機会に恵まれた。離れて見ると着色なのかカビなのか苔なのかかわからな

いが、間近で見ると顔料の色彩と有機物との違いがはっきりと見てとれた。緑土の美しさ、弁柄と黄土の塗り重ね、混ぜ具合による多色表現から、仏像全体に塗られていた制作当時はさぞ美しかっただろうとの想像は難くない。また当時はお堂の中。薄明りの中で見ると美しさ、さらには古園の前に広がっていた池に太陽の光が反射してお堂の中を照らす様子は、まさにこの世の浄土というインスタレーションだったのではないかと。1000年前の色彩に思いを巡らすとドキドキする。



【 石の引力・色が残る-2 】

顔料を見ながら1000年前の色彩についての話をした。国東半島豊後高田市にある富貴寺大堂は、平安建築の一つとして国宝に指定されている。大堂の中、壁画で使用されていたと思われる顔料は退色が進んでしまったが、描かれた当時は多彩で鮮やかだったようだ。大分県立歴史博物館にはその復元模型が展示されている。

鉱山の多い大分県だが、県内で産出する鉱物は果たして絵の具として使われたのだろうか。県内を歩き回り、採取した石を砕き、土をふるいにかけて、カラフルな色彩に目を見張る。歴史的にはどこにも記述されていないが、こんなに多くの色彩が得られるのなら、何かを描く時に使っていたのでは?と思ってしまう。この話を絵の具の研究や修復を専門とされている森田恒之氏に話したところ、それは十分あり得ること。足元に転がる石ころだが、歴史に登場した色だと想像すると、もはやただの石ころとは思えなくなった。



B

「プラント&メディシン・ボックス」より

【 毒にも薬にも絵の具にも 】

プラント&メディシン・ボックスから、植物の色の話をした。どんな植物も必ず色素を持ち、色は染まる。しかし古来から植物染料として名前が挙がるモノは特定されている。それは生薬。飲んでよし、塗ってよしの生薬で染めたモノを身につけていると、まじない的な意味合いと実際の効用が相まって心身に良いとされ、植物染料として使われてきた。そしてトリカブト、ケシ、大麻。これらは手術に用いる麻酔薬であるのと同時に、麻薬だ。

植物は染料としてだけではなく、顔料として使うこともできる。炭酸カルシウムに植物の色素を染め付けする、いわゆる体質顔料だ。どのような絵の具ができるか、制作工程の実験をした。まずはドクダミやヨモギを道端から採り、刻んで煮沸。次に染液を取り出し、そこに胡粉や白土を入れてみる。その後、アルミと鉄を媒染剤として入れてみた。結果、淡い色が染まりついた。これはまだまだ実験の域を出ていない。薬にも毒にも絵の具にもなる、それが植物だ。



【 特別な染めをする植物 】

多くの植物染料は、葉っぱ、花、茎、根っこ、樹皮などの部位を刻んで煮出した抽出液で染め、その色素を金属塩で媒染すると発色する。しかし紅花と藍は酸化と還元で染める。また竹田市で栽培する紫根による紫の染色は、栽培、染色ともに手間ひまがかかる。これらの特別な染めによる貴重な色を、原料となる植物と染色した布を手に取りながらじっくり見た。



【 竹工芸の魅力 】

竹にはいろいろな種類がある。教材ボックスに取められているマダケ、モウソウチクをはじめ、ハンモンチク、キッコウチクなど、それぞれ太さや模様、節の形状などが違って興味深い。触りながら見比べた。また竹を素材として工芸品をつくる場合、伐採した竹に油抜きという加工を加えてから使う場合が多い。その工程の画像、そして竹工芸を制作する道具や基本的な編み方を、見本を触りながらレクチャーした。



【 バンブー・トイ 】

バンブー・トイは身体と感覚を活性化させるために教育普及スタッフが考えたオリジナル教材。「積み竹」は薄くスライスした竹を積層して作ったもので、形態は積み木だが竹の香りがする。「たけびよん」はその名の通り、端を持って揺らすと、竹と一緒に身体の筋肉がびよびよん弾む。長さ約180cm。両サイドに開けた穴を組み合わせると、正三角形を基本としたオブジェなどつくれる。「りんこちゃん」はアトリウムにある須藤玲子氏による作品の輪弧編(りんこあみ)から着想を得た。持って揺らしたり、ぐるぐる回せる。これらのバンブー・トイをどう使うか。コンテンポラリーダンスカンパニー86B210がバンブー・トイを使った即興表現の映像を見ると、その動きに影響されて、存分にバンブー・トイを触りまくった。



【 タネのカタチ〜したたかな造形美 】

植物の生長する姿を高速度撮影でとらえた科学番組を見ながら、音声を消して音楽をかける。「何か世界がヤバイことになりそう」。映像はタンポポのタネが飛び、地面にたどり着いて発芽していく様子。音楽を変えると「心地よい」「生命力を感じる」。音に触発されてイメージは大きく変わった。倍率20倍の実体顕微鏡でタネを視ると、そこは驚異の世界。センダングサは動物の毛に引っかかるため鉤(かぎ)状になっている。桃のタネはまるで月面か異星のように凹凸の激しい山脈が広がっている。思わず「すげえ!」の連発。命の形は美しい。植物が自らを増やすための形態も、造形物としてとらえると非常にデザインされたものだった。



〔木に親しむ〕

県内の雑木林に生育するクスギ、イチョウ、ヤマザクラをはじめ22種類の樹の見本。これは県の農林水産部林産振興室に集めてもらった。重さ、手触りを手の中で確かめながら木肌模様を見比べる。ゴツゴツした木の肌はかすかに匂いが残る。ぎっしり年輪が詰まった桜の木口は、細い線刻を施す木口木版に最適だろう。切り出しナイフで桜の枝の削り心地を味わう。鉛筆を削る要領で、刃物は動かさず、枝の方をスライド。ほのかに木の香りが漂い始める。黙々と削る参加者の面々。「カニを食べている時みたい」と誰かが言うと、大爆笑となった。



〔CCボックス〕より
〔炭酸カルシウムのカタチ〕

炭酸カルシウムは貝殻や珊瑚、鶏卵の殻、石灰岩、方解石、霞石、大理石、鍾乳石、白亜などの主成分であり、用途や使われる場所によって呼称が変わる。CCボックスからさまざまな炭酸カルシウムを手に取り、形状や重さ、ディテールを見比べた。

大分県は特有の炭酸カルシウムが多い。石灰岩の層が津久見市のセメント山から白杵市の風連鍾乳洞、佐伯市の小半鍾乳洞、そして豊後大野市の稲積水中鍾乳洞へと続いている。その自然の造形美を、付近で拾った石とともに見た。さらに壁や天井に塗られる漆喰と鏝絵。あらかじめ顔料に漆喰を混ぜてつくる大分県の鏝絵はレリーフ状の色彩絵だ。日田市の左官の親方、原田進氏が制作した漆喰壁の構造見本と安心院の鏝絵のレプリカをじっくり見た。



〔マテリアル&テクニク・ボックス〕より
〔折り紙の布〕

美術館アトリウムに展示された作品「水分峠の水草」は、布を折り紙状にして制作されている。作者の須藤玲子氏はさまざまな布をつくるテキスタイルデザイナーだ。アートカードで山折り・谷折りの繰り返しを作り、布の構造を知る。それからポリエステル生地を熱加工した折り紙ブリーツや、ブリーツのパターンを織組織で表した折り紙織を見ると、作品がより身近になった。



〔染・その魅力〕

古澤万千子氏は、糊防染による型染、絞り染、手描き染を併用して着物を制作している染色作家である。はじめに天平時代の三纈(さんげち)から、室町時代の絞り染の多色表現、辻が花染の流行など、日本の染色の歴史の話を技術中心に行った。その後、教材ボックスのために古澤氏が制作した「手毬こども着物」とその制作工程見本を見た。



〔肌触り・触覚の覚醒〕

世界と出会うためのアンテナである感覚は、自ら意識しないと眠ったままであることが多い。人間の五感の中でもとりわけ触覚は、全身に巡らされているので、生きているという存在感が伴う感覚だ。テキスタイルデザイナー・須藤玲子氏の布を味わうには、触角の覚醒は大きなテーマとなる。触覚を目覚めさせるには目をつむり、身体の隅々まで丁寧に意識を集中する。背中、膝の裏、右足の小指、左の耳たぶ。意識を向けると、今までは何も感じていなかったことに気づく。たとえ何も触っていないと思っても、そんなことはない。空気に触れていることを、温度や風が教えてくれる。このように触覚に対して意識を持つために、みんな目隠して手を洗いに行き、それから須藤氏の布を触った。



ABCD共通
〔写真大公開〕

教材ボックスの中で、普段はなかなか公開できない画像も少なくない。富貴寺大堂壁画や白杵磨崖仏、鏝絵などの文化遺産、鍾乳洞や本草植物図譜などの写真を一挙大公開した。まずCCボックスに内蔵されているライトボックスを使って、次に単眼鏡を使ってディテールを観察。貴重な画像のために息が漏れ、実物を見に行きたいという声があがった。



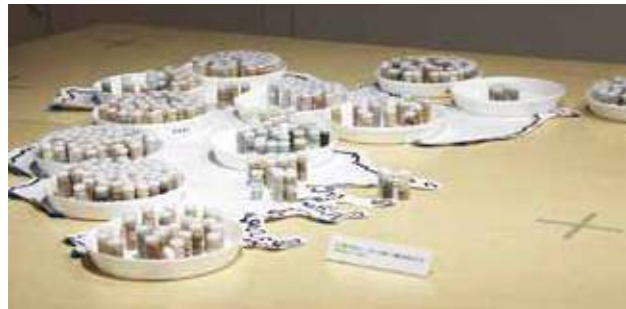
2

大分県から絵の具をつくる

画材屋や文房具屋がない時代、絵の具がなくなったらどうしていた？動物の血は赤く、最も身近な色材になるかも知れない。しかし時間が経つと黒く変色するし、血で書いた文字や絵は嫌悪感がある。血が絵の具として用いられたのは、特別な儀式においてだろう。植物、花びらや葉っぱも時間が経つと変色してしまうが、染料として用いられれば媒染剤の種類によってさまざまな色を得ることができ、体質顔料をつくることもできる。しかし何となく土や石、鉱物を砕いて顔料とするのが、絵の具として一番とられていた方法だ。大分県は広い。地域ならではのものを使って絵の具ができないか。実験と試行錯誤を繰り返し、レクチャーやワークショップにも展開している。



【ザ・ピグメント ○○色をつくる】



ピグメントとは絵の具のもと、顔料のことだ。県内各地の石ころから顔料をつくっている。津久見色、別府色、姫島色など、行く先々の名前を付けた、その地域特有の色をつくらうという試みである。講座では参加者が石を金槌で叩き、茶漉しでふるいにかける。乳鉢ですりつぶし、#300の紗幕を通過させると、パウダー状の顔料ができた。石を砕いたとは思えない、柔らかなパステル色の顔料に、「おー!!」と歓声が上がった。さらにフライパンで焼くと、色が変わるものもある。

もちろん絵の具をつくること自体面白いが、ただ面白がるだけでなく、地域の石や土から絵の具ができることを通して、モノの見方や価値感が変わればと思っている。それは世界が広がることでもある。最終的には大分県18市町村の石や土から1万色の顔料を制作し、教材ボックスに収めることを目指している。

【関サバ・ボーン・ブラックの秘密】



ボーン・ブラック、ピーチ・ブラック、バイン・ブラック、アイボリー・ブラックは、今では色名しか残っていない黒い絵の具だ。古くはそれぞれ牛の骨、桃のタネの核、ブドウの蔓、象牙を蒸し焼きにして炭にしていたらしい。その材料が色名の一部として残っている。では大分県ならではの黒い絵の具をつくるとしたら、何が考えられるだろう。関アジ、関サバ、姫島車エビ。どれも大分県の名産品だ。笑い話にしか聞こえないとの心配もよそに、まじめに取り組んだ。

初めにつくってみたのが関サバ、関アジのボーン・ブラック。美術館近くの居酒屋に行き、骨をもらえないかと相談したら、「絵の具なんてできるの？」と女将に不思議そうな顔をされた。姫島の車エビは、島の小・中学校へアウトリーチに行くたび、昼食に焼車エビ定食を頼み、殻はおいしいのに食べずに我慢して持ち帰った。骨も殻も空き缶に入れて蒸し焼きにすると炭になる。植物系、例えば木の枝や松ぼっくりは燻製のようなにおいがすることが多く、好き嫌いがわかれる。牛の骨など動物系はとも嫌なにおいだ。リンが燃えるからか、火葬場のおいに近い。しかし関アジ、関サバ、そして車エビは香ばしいにおいになった。こうしてつくった大分ならではの黒い顔料に驚く参加者たち。「そんなことができるんだ!」と笑い声が上がった。

【展色材】

朝寝坊して卵かけ御飯を急いで食べている時に、洋服にこぼしてしまう。濁くとガビガビになり、洗ってもなかなか落ちない。そんな経験はないだろうか。そういう性質を持つ卵を展色材として使ったのがテンペラ画だ。展色材は顔料の粉をキャンバスや紙面などの支持体につける糊のような接着剤のような役割を果たす。展色材の種類により、同じ顔料でも発色は異なり、絵画ジャンルも変わる。水彩画の展色材はアラビアゴム。動物の骨や皮を煮出して抽出する膠は、日本画で使われる。煤と混ぜると墨になる。乾く性質の油を使ったのが油絵の具だが、混ぜるのではなく、よく練ることが肝心だ。

展色材は、一般的には展色剤という字を使うことが多いが、ここでは色の材料という意味を強調させたいので、材の字を使っている。今は県内の石や土から顔料をつくっているが、ヒマワリのタネから油、関アジ・関サバ、そしてイノシシから膠など、ゆくゆくは展色材も大分県産のものでつくりたい。こうした専門的な話とともに、実際の展色材と顔料を混ぜるといった初めての体験に興味津々の参加者たちだった。



【幻のイタボガキ胡粉】

胡粉はもともと鉛からつくられる白い絵の具を指していたが、室町時代のころより貝殻からつくられるものを指すようになった。中でもイタボガキやハマグリ、ホタテは白色度が強く、天日・風雨にさらして風化させ、胡粉をつくった。山口県周防灘の海岸でイタボガキを拾ったことがあり、大分県でも周防灘に面している中津〜豊後高田の海岸に流れ着いているかも知れないと、探してみた。しかしまったく採れない。探し続けると、なんと豊後高田の岩本水産で養殖してインターネット販売していた。すぐに訪ねて行く。すると豊前海には海底の石に付着した天然イタボガキが生息しており、養殖も始めているとのことだ。講座ではこのイタボガキをみんなで砕いてみたところ、キメの細かい真っ白な粉になった。これでまた1つ、大分のモノで教材ボックスは充実することとなった。



【松竹梅ピスタ】

ピスタというインクの名前を聞いたことがあるだろうか。今ではほとんど聞かないが、14世紀から19世紀に使われていた、植物タールからつくるインクである。『世界素描体系』(講談社)によると、多くの作家がピスタを使っていたらしい。そこで大分県産の松ピスタと竹ピスタをつくってみた。松や竹を空き缶に入れ、蒸し焼きにして炭を作る際に、缶に付着した植物タールを丁寧に筆と水で溶かす。その上澄み液をとるとピスタができた。もう少し簡単に抽出する方法を博物学者の森田恒之氏に教わる。試験管に松の木を削ったチップを入れ、直接ガスコンロであぶるのだ。みるみる炭化し、茶色い液体が少しずつ流れ出て底に溜まった。この実験は美術館で行うわけにはいかないので、講座では映像で紹介した。

次は梅の木からピスタを抽出したい。すでにいつも参加されている方から豊後梅の枝をもらっている。松竹梅3種のピスタは果たして描き心地や発色は異なるのだろうか。解明の日も近い。



3

美術からみた文化



身の回りにあるさまざまな事象・現象を美術的視点でとらえたり、絵画、彫刻や建築、さらには洞窟絵画から現代美術までの美術作品に美術史や図像学を交え、美術を視る楽しさを知るための体験型レクチャー。映像や画像、そして作品から「見る」「観る」「視る」について考える『視点と視線』、水の特性をふまえた美術作品を紹介し水の存在を考える『水のゆくえ』、植物そのものの形から生命力までを表現した作品を紹介しつつ展示作品を視る『植物ってすげえ!』などを行っている。

4

素材と技術



美術作品を制作するためには素材と技術が必要不可欠。その2つの関係に、実際に素材や道具を触りながら迫る体験型レクチャー。素材としての竹が工芸のヒゴに変わることや、その道具についての話『竹・素材の変容』、繊維を紡いで糸にする最も原始的な紡ぎ車スピンドルを使った『紡ぐ』などを行っている。